

年月日

同上 (西曆)

記事

寶永五年閏正月三日
寬政四年六月二十九日

一七〇八年 二月二十四日
一七九二年 八月一日

此火口底ヲ通過スルナリ、火口ノ四周及ビ下底ニハ爆裂當時ノ石彈飛在シ又此爆裂ニ際シ地下ノ岩漿ハ少シク噴出セシモノニシテ瓦斯體噴出ノ勢甚シキ爲メ皆小塊トナリテ騰揚セラレ火山彈ヲナス、小ハ長サ二寸ヨリ大ハ二三尺ニ達スルモノアリ、其形狀ニ因テ人之レヲ鯉節石或ハ茗荷石ト云フ。(震災豫防調査會報告第二十四號 平林理學士報文)
三河駿河相模武藏砂ヲ雨ラス。(綴玉代 一覽)〔按ズルニ富士山ノ噴出ナランカ〕
二十九日丙申江戸地震、此夜震ニ富士巖石飛ビ死スルモノ二十餘人。(野史)
〔接ズルニ富士山ノ鳴動ナルベシ〕

第十二表 伊豆大島噴火

年月日

同上 (西曆)

記事

天武天皇十二年十月十四日

六八四年 十一月二十九日

冬十月壬辰、逮ニ于人定ニ大地震、擧レ國男女叫唱、不知東西、則山崩河涌、諸國郡官舍及百姓倉屋寺塔神社破壞之類不可勝數、由是人民及六畜多死傷之、時伊豫湯泉沒而不出、土佐國田苑五十餘萬頃沒爲海、古老曰若レ是地動未嘗有也、是夕有鳴聲、如鼓聞于東方、有人曰伊豆島西比二面自然増益三百餘丈、更爲一島、則如鼓音者神造是島響也。(日本書紀)
按ズルニ此ハ彼ノ有名ナル土佐地震ノ記ニシテ、京都ニ於テ同日夕刻

天永三年十月二十二日

一一二二二〇

ニ鼓聲ノ如キ音響ガ聞コヘタルハ偶然時ヲ同フセルナラン、蓋シ是レヨリ先キ伊豆島ノ大噴火アリテ新タニ一島ヲ生成セルヲ以テ當時神造島ノ響ナリトノ説ヲ唱ヘタルナルベシ、音響ガ東方ニ聞コヘタリト有レバ伊豆島トハ伊豆七島中ニ相當スルモノナルベシ、而シテ村岡氏ノ日本地理志料ニ此時生成セル島ヲ七島中ノ一ナル新島トセラレタルモ此ノ所謂「新島」ハ大島ノ西岸新島村野増村ノ地區ニ相當スト見ル方然ルベキガ如シ。

天永三年壬辰十月二十二日從ニ去夜ニ雨下、午後雨止、從ニ一昨日、東方有ニ鳴動聲、其響如打ニ大鼓、衆人驚奇、不知ニ何所。二十三日丁未天晴、已時許大鳴動、世間驚恐極、是何徵哉。二十九日當ニ東方、夜晝有ニ鳴動聲、不知ニ何所。十一月二日天晴、已時許、大有ニ鳴動、聲如ニ我頭響、大略天之所爲歟、非ニ東國山聲ニ歟、甚不得心事也。(中右記)

應永二十三年八月二日

一四一六 九 二

大島發火、響如雷。(野史)「應永二十三年九月九日伊豆大島燒。(神明鏡)

應永二十八年四月四日

一四二一 五 一四

大島燒、其響如雷、海水如熱湯、魚多死。(鎌倉大日記)「伊豆大島發火、響如雷、海潮沸騰如湯。(續日本史)

貞享元年二月十六日

一六八四 三 三一

大島大噴火。二月十六日ヨリ二十七日迄烈シク繼續シ「山中ヨリ峰ヘ燒ケ上リ、鎔岩ハ蠟ノ如クニ海ヘ燒ケ流レ、七八町程山ニ成レリ」ト云フ、又タ此ノ「神火ニテ山燒ノ節峰ニ洞出來シ御洞ト申傳候由天和四年(即チ貞享元年)ヨリ元祿三年迄七ヶ年ノ間山燒候節、山上ニ凡拾町四方程ノ洞穴出來……」トアリ、要スルニ三原中央火孔丘頂上ノ噴孔ハ往時ヨリ存セ

年月日	同上 (西曆)	記事
貞享元年三月八日	一六八四年四月二十二日	ルナランモ、貞享元年ノ大破裂ニヨリテ現時ノ如ク巨大ナル噴火孔ヲ生出シタルモノナルベシ。 <small>(震災豫防調査會報告第四十六號第七十九號第八十一號)</small> 三原山御洞ヨリ一里程下寅ノ方字小釜瀧下ヨリ海邊燒出跡、當時字新築出ト申傳候。 <small>(同上)</small>
安永六年七月二十九日	一七七七年八月三十一日	安永大噴火第一期ノ破裂開始。夜中ハ山上一面ニ火光ヲ現シ燒音甚シク、時々地震シ <small>(空氣振動ナルベシ、以下同シ)</small> 、火山砂ハ島中二三ヶ村ヘ降り、又長サ一寸乃至二三寸ノ火山毛ハ全島中ヘ降下シタリ。八月二十五日頃迄ハ格別活動ノ異變ナク、同二十七日ニ至リテ燒音地震共ニ休止シタガ、翌二十九日ハ降雨ニ係ラズ噴火甚シク、九月六日ノ曉ヨリ一層破裂ノ勢ヲ増シ、翌安永七年正月月中旬比ハ火氣燒音共別シテ強カリシガ、同月下旬ヨリ噴火ハ稍々鎮靜ニ向ヒタリ。 <small>(同上)</small> 安永六年丁酉夏ヨリ伊豆大島燒始メ南海ヘ火燃出ル品川沖ニテ夜々火光天ニ映スルヲ見ル。
安永七年三月二十二日	一七七七年四月二十七	<small>(武江年表)</small> 第二期。噴口ヨリ西北ヘ燒出デ字中ノ澤ヘ鎔岩ヲ流出セシガ泉津村ヨリ東方約半里ニ當リ村民山稼道下ニテ停止セリ、長サ約一里、幅約十間深サ十五六間ナリシト云フ。其後破裂ハ勢ヲ減シ孔内ヨリ黒煙ヲ發シ、多少ノ噴火ハアリシモ村民等ハ五月ヨリ八月上旬迄ハ山稼ニ従事スルヲ得タリ。 <small>(震災豫防調査會報告第八十一號)</small>
同 七年九月十八日	一七七七年九月十六	第三期。八月下旬ヨリ噴火再ビ盛トナリ九月十八日ニ至リ噴孔ヨリ西

同 七年十一月二十一日

一七七八一 二二一八

南へ焼出シ、野増、差木地兩村ノ間ナル赤澤へ幅七八間、深サ三十間程ノ鎔岩流ヲ押出シ道路ノ上ニテ焼止マリタリ。九日ヲ距テ九月二十七日(太陽曆十一月十五日)ニハ噴孔ヨリ東北ニ當レル「ゴミ」澤へ横幅二十餘町ニ亘リ鎔岩ヲ夥シク押出シ東方海邊へ燒ケ下リ海へ約一町突キ入り水上ノ高サハ五六間ニ及ベリ。(上同)
 第四期。十一月十七日ヨリ更ニ噴火ノ勢ヲ増シ、二十一日正午頃ニ至リテ葉地釜ヨリ煙立チ火燃出タリ。(上同)
 去年暮ヨリ伊豆大島燒出夜毎西南鳴動シテ江戸迄モ響キ渡レリ。(武江年表)
 (安永ノ大噴火以後比年多少ノ降灰アリシナリ)

同 八年

一七七九

十月朔日伊豆大島燒、二日江戸中灰降。(上同)

寛政元年

一七八九

十月二日夜江戸灰降ル、同十八日未刻ヨリ江戸大霧東西南北甚闇シ人面見ヘズ、同十九日又霧降ルコト煙ノ如シ。(續日本王代一覽)

享和三年十月朔日

一八〇三一 一一一四

大島噴火シ二三年間降灰ス。(震災豫防調査會報告)
 大島四日間噴出。(上同)

文政五年

一八二二

此ノ噴火モ從來ノ三原舊噴火孔底面ニ存セル火穴ヨリ起コレルモノニシテ、十二月下旬ヨリ始マリ、約一週間ヲ經テ次第ニ其勢力ヲ増シ、二十七日ニ至リテ午後三時頃ヨリ地震(氣振ナラン)ヲ發シ、同夜始メテ山上ニ火光ヲ見ルニ至レリ、爾後二月六日頃迄約四十日間活動ヲ繼續セル結果所謂「ナウマン」岩滓丘ヲ形成スルニ至レリ。噴火發生ノ順序、繼續日數等ハ明治四十五年及ビ大正元年ニ於ケルト好ク相似タリシモ、地震ハ

明治三年

一八七〇

大島四日間噴出。(上同)

明治九年十二月

一八七六一 二二一

此ノ噴火モ從來ノ三原舊噴火孔底面ニ存セル火穴ヨリ起コレルモノニシテ、十二月下旬ヨリ始マリ、約一週間ヲ經テ次第ニ其勢力ヲ増シ、二十七日ニ至リテ午後三時頃ヨリ地震(氣振ナラン)ヲ發シ、同夜始メテ山上ニ火光ヲ見ルニ至レリ、爾後二月六日頃迄約四十日間活動ヲ繼續セル結果所謂「ナウマン」岩滓丘ヲ形成スルニ至レリ。噴火發生ノ順序、繼續日數等ハ明治四十五年及ビ大正元年ニ於ケルト好ク相似タリシモ、地震ハ

年月日 同上 (西曆)

記事

明治四十三年十二月
明治四十五年三月

一九一〇年 二月 日
一九二二 三

明治四十五年七月二十七日

一九二二 七二七

頗ル激シクシテ十二月二十九日ノ如キハ地震ノ爲メニ幅數分ノ地割ヲ生ズルニ至レリ。(震災豫防調査會報告第七十九號第八十一號)
時々小鳴動アリ、幾分活動ノ端ヲ開ク。(同上)
明治大正大噴火第一期。二月二十三日夜ヨリ多少鎔岩噴出ヲ始メ三月六七日夜ニ及ビテハ元村ヨリ判然山上ノ火光ヲ認メタリ、四月三日、四日、五日ニ至リテ噴火ハ最モ盛トナリ、同月十日ニハ噴孔底全面積ハ涌出セル鎔岩ニテ充タサレ新岩屑丘ハ其ノ中ヨリ隆起シテ約四十米ノ高ニ達セリ鎔岩ノ噴出ハ壯大ナル仕掛花火ノ如ク一分間ニ約十回ツツ百雷ノ如キ鳴響ト共ニ眞紅ノ火花ヲ噴出セルモノニシテ夜間ノ光景ハ特ニ美麗ナリキ、吹き飛バサル鎔岩ノ細片ハ約千尺ノ高サニ達スルモノアルモ、破裂ニ煙ヲ伴フコト無ク爆發的性質ハ殆ド皆無ナレバ噴孔壁ヲ攀チ下リテ孔底ノ赤熱鎔岩層ニ達スルヲ得タリ。六月十日前後ニ及ビテ噴火ハ全ク鎮靜セルガ孔底ノ鎔岩層ハ結局百十四尺ノ厚サトナリ、又新岩屑丘ハ噴火孔舊底面ヨリ約三百十尺ノ高サトナリ、噴孔壁最低點ヨリ下僅ニ四十尺ノ差迄ニ達シタリ。此ノ噴火ハ著ルシキ火山性微動ヲ伴ヒタルモ、絶對ニ地震ヲ混ゼザリキ。(震災豫防調査會報告第八十一號)
第一期噴火ノ殘餘活動。七月廿七日ヨリ噴火活動アリ夜ハ山上ノ空ニ赤ク映ジタリ、二十八日ハ「ゴー」ト音響最モ甚シク、夜ニ入りテハ元村ニテモ聞クヲ得タリ、二十九日夜ノ如キハ火口ヨリ連續シテ花火ノ如ク

大正元年九月十六日

一九二二 九一六

鎔岩ヲ吹キ上ゲ噴孔壁頂迄モ達シタリト云フ。要スルニ第一期噴火後既ニ凝固セル孔底ノ鎔岩層ハ周邊ノ圈狀部ヲ殘シテ全部俄然九十餘尺ノ陷落ヲ受ケタル爲メ、壓迫セラレタル下層ノ鎔岩ハ許多ノ裂罅小噴口（約十個所ニ及ブ）ヨリ再ビ赤熱鎔岩ヲ噴出セルモノナルガ三日間ニシテ活動ヲ止メタリ、此ノ變動ノ結果トシテ第一期ノ新成岩層丘ハ破壊セラレ高サ約六十五尺ヲ減ズルニ至レリ。（上同）

第二期。九月十六日夕ヨリ更ニ破裂ヲ開始シタルガ噴口ハ第一期ノ時ヨリモ北西ニ偏シタリ、鎔岩ヲ花火ノ如クニ噴出セル狀況ハ一層ノ壯觀ヲ呈シタルモ第一期トハ異ナリテ地ノ震動ヲ伴フヲ無カリキ、十八日ニハ鎔岩噴出既ニ烈シク、同月三十日ノ如キハ噴出セル鎔岩塊ガ落下ニ約七秒時ヲ要セルヲアリ、十月七日頃ニ及ビテハ盛ニ綿狀ノ岩漿ヲ噴出シ破裂ノ音響ハ元村迄デ聞コヘタリ」第二期噴火ハ四十三日間繼續シタル後、十月二十九日午前三時頃ニ至リ終熄セリ、其ノ結果生成セル第二期岩層丘ハ頗ル大ニシテ鎔岩層ヨリ聳立スルヲ約百三十五尺ニ及ビ立派ナル富士山形ヲ呈シ、容積ハ第一期ノモノニ比シテ十倍ニ當レリ、爲メニ第一期岩層丘ハ第二期岩層丘ノ麓ニ其ノ頭部ノミヲ露出スルヲトナリ、「ナウマン」丘ノ頂部モ鯨背ノ如キ狀ヲ爲シテ、僅ニ鎔岩層上ニ形ヲ止ムルニ過ギザルニ至レリ。又孔底ヲ充タセル第二期ノ湧出鎔岩ノ容積ハ第一期ニ比シテ約一・五倍ノ大サニ相當シ七月末ニ陷落セル孔底ノ凹ミ深サ約九十尺ヲ填充シ、其ノ上更ニ百尺ノ高サニ達シタリ。（上同）

年月日

同上 (西曆)

記事

大正二年一月十四日

一九二三年 一月十四日

大正三年五月十五日

一九二四年 五一五

第二期噴火ノ殘餘小活動。一月十四日より次第に始まり十八九日ニハ孔底ノ粗ボ中央ニ當リテ一小火丘ヲ作り盛ニ鎔岩ヲ噴出シ、初發ヨリ十日間ヲ經テ同月二十五日ヲ以テ終結シタリ、第二期噴火ノ際ニ湧出セル孔底多量ノ鎔岩層ガ著ルシク陷落セルニ伴ヒタル變動ナリ。(上同)

第三期。五月十五日夜半ヨリ噴火シ十六、十七、十八ノ三日間ハ活動最モ盛トナリ、噴火口ヨリ岩漿ヲ巨大ナル綿玉ノ如クニ抛出シ、泉津、波浮、差木地方面ニ少量ノ降灰砂アリ、十八日ニハ元村ニモ降灰セリ、十九日夜ヨリハ火勢減退シ、二十一日頃ヨリハ連續的噴火ヲ止メ、一日中ニ數回多少爆發的ニ噴出スルコトナレリ。十七、十八日夜ハ破裂ノ火光ニテ元村ニテハ薄明ルキコト新月ノ光ノ如クナリキ、二十六日以後ハ噴烟休止セシガ、三十日午前八時十五分頃並ニ三十一日午後六時半頃三原ヨリ噴烟セルヲ元村ヨリ望見シタリ。今回ノ噴火ニ際シテ岩漿ヲ拋射セルコト甚ダ多ク、偏平ナル鎔岩ガ落下シテ牛糞狀若クハ鏡餅ノ如クニナレルモノ夥カリキ。孔底ノ狀況モ大變化ヲ呈シ、「ナウマン」丘及ビ第一期第二期兩岩層丘ハ何レモ新鎔岩ニ埋没セラレテ殆ド形跡無キニ至リ、新丘ノ高サハ孔底ノ新鎔岩層陷落面ヨリ約二十五米ニ達シ、噴孔周壁最低點ヨリ高キコト一米トナレリ。第三期ニ孔底ニ涌出セル鎔岩ハ第二期鎔岩層ヨリ以上九十六尺ノ厚サニ及ビ、噴孔壁北部川尻ニ於テハ斷崖ヨリ新鎔岩面迄僅ニ四十六尺ノ深サトナレリ。(上同)

大正四年十月十四日

一九一五 一〇 一四

十月十日頃夜間山頂ニ火光ヲ認メタルコトアリ、十四日午前九時ヨリ黒烟ヲ噴騰シ細末ノ黒灰ヲ元村、佐ノ濱等各所ニ降下シタレドモ其ノ量ハ多カラズ、十五日モ烟多ク立チ昇リ音響アリ、十六日夜半山頂ヨリ盛ニ火光ヲ發シ元村ヘモ爆聲強ク聞コヘ約一時間硝子障子ヲガタガタト振動セシメタリ、爆聲ハ「ドン」ト強キ轟鳴ニ非ズシテ遠方ヲ汽車ガ走ルガ如キ音ナリ、鎔岩ガ拋射若クハ孔底ニ流レ出ヅルコト無カリキ。十月十六日最盛時期ニ達シ同月末迄デ多少活動ヲ示シタリ。(東洋學藝雜誌 第四百十一號)

第十三表 三宅島噴火

三宅島地役人壬生成次郎氏藏三宅島詳異記及ビ三宅島御神火之記ニヨル

年月日	同上 (西曆)	記 事
應德二年	一〇八五年	噴火。
久壽元年十月	一一五四 一	噴火。
應仁三年十一月十二日	一四六九 一二二四	噴火。
天文四年二月	一五三五 三	噴火。
文祿四年十月二十一日	一五九五 一一二二	噴火。
寛永二十年二月十二日	一六四三 三三二	雄山噴火ス「二月十二日酉ノ刻(午後六時)大雨降出シ雷電頻ニシテ大地震動ス戌ノ刻(午後八時)ニ至リ山中ヨリ神火ヲ發シ阿古村在家一軒モ殘ラズ燒失ス、夫ヨリ海ノ方ヘ十町許燒出ス、又西ノ方鑄之濱ヘカケ海ノ